

77%の大学生が在籍大学に満足。 その影響要因を探る

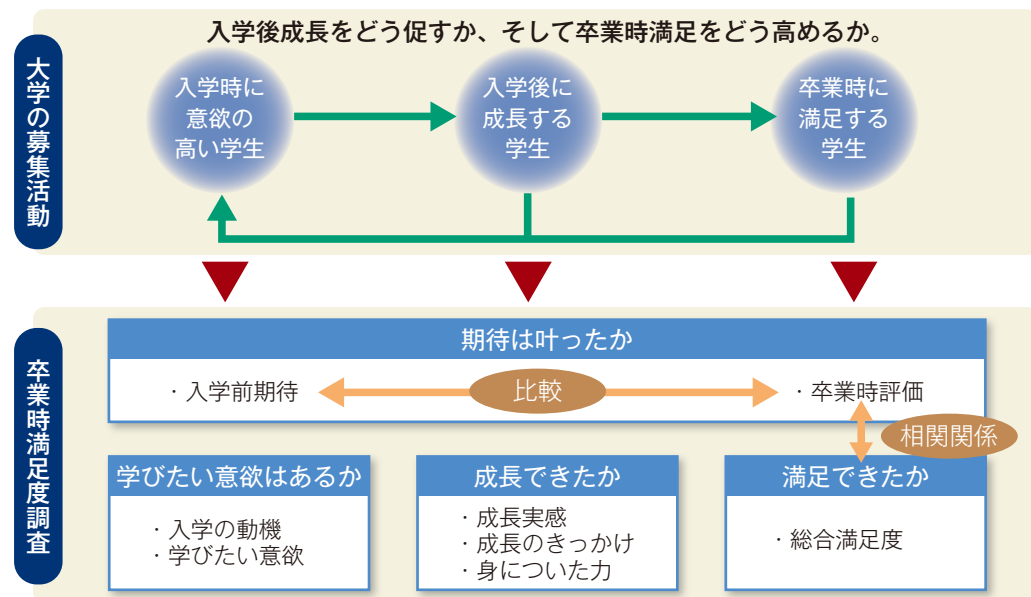
池内摩耶 リクルート進学総研 研究員

2014年12月答申「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について」では、「大学教育は教員が何を教えたか(input)よりも、学生が何をできるようになったか(outcomes)を重視し、学生の学修成果の把握・評価を推進することが必要である」と記している。まさに、「入学がゴールの国」から「卒業が評価される国」実現に向けて、各大学は大きな変革を求められている。これからは、大学独自の建学の精神や理念、特色を活かして「どんな人材を社会に送り出していくのか」が大学の価値となり、エンrollment・マネジメントと呼ばれる、入口(入学)→中身(教育・研究)→出口(就職)までを一貫させた経営、教育マネジメントを行っていくことが重要となってくる。

そのような背景からリクルート進学総研では、現在における学生の大学評価(総合満足度・入学前の期待・卒業時の評価及び成長実感)を把握することを目的に「卒業時満足度調査」を初めて実施し、2015年3月に学校を卒業する予定の大学生1703名から回答を得た。

大学における教育改革の参考にぜひして頂きたい。

図表 調査概念図



調査概要

調査目的: 大学生に対する総合満足度・入学前の期待・卒業時の評価及び成長実感を把握する。

調査方法: インターネット調査

調査対象: 株式会社クロスマーケティング社のモニター会員のうち、2015年2月時点で日本国内の大学に在籍している学生を対象にスクリーニング調査を実施。そのうち2015年3月に学校を卒業する予定の大学4年生・大学6年生で18~25歳までの男女。

調査期間: 2015年2月27日(金)~3月26日(木)

集計サンプル数: 大学生 1703人

※集計時に、北海道/東北/北関東/南関東/北陸・甲信越/東海/関西/中国・四国/九州・沖縄/その他エリアそれぞれにおいて、平成26年度学校基本調査(確定版)から、当該年度の大学在学者数の男女構成比を算出し、エリアごとの男女構成比を補正している。

1 大学生生活に満足しているのか

●大学生の総合満足度

77%の大学生が「満足している」

大学生は、大学に満足しているのだろうか。入学した大学に在籍したことへの満足度を問うた。

まず全体を概観すると、大学に在籍したことに29%が「とても満足している」と回答(図表1)しており、「ある程度満足している」と合わせると、全体の7割以上が大学に入学し在籍したことに満足していることが分かる。

「満足している」を属性別に見てみる。男女別では、男子に比べ女子の

ほうが高いという傾向が見てとれる。志望順位別では、入学時第1志望のほうが第2志望以下より14%高くなっている。また、男女×文理別に見ると、文系女子が一番高く83%、続いて理系女子82%、理系男子75%、文系男子が70%で最も低い。

●満足度と影響要因

総合満足度と最も相関が高い項目は「教育方針や校風に魅力がある」

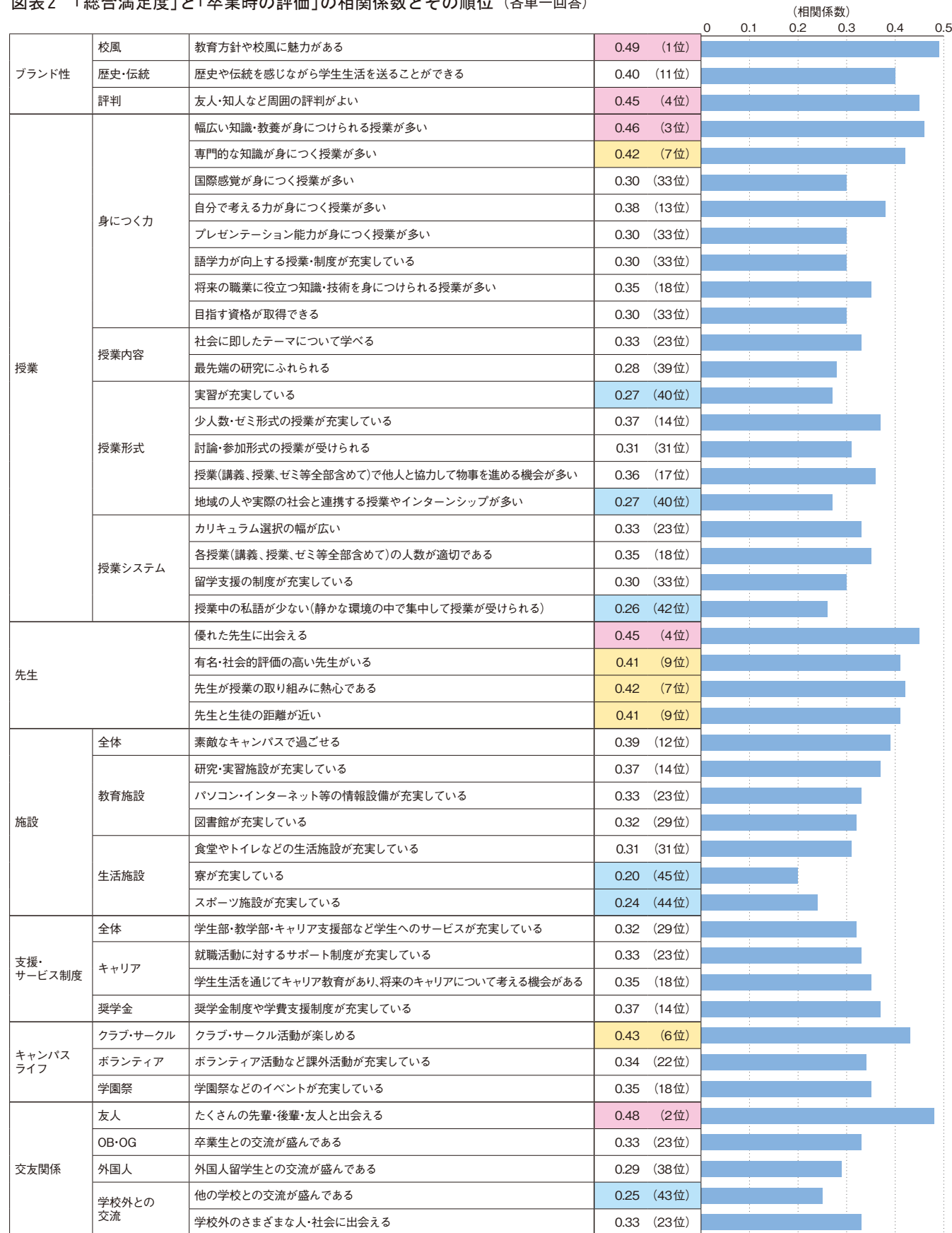
大学生生活の満足度は卒業時の評価とどのような関係があるのだろうか。それらの相関係数を概観すると、0.5以上の非常に強い相関関係のある項目はなかった。つまり、大学の満

足度は何か一つの大きな要因と相関があるわけではなく、いくつかの項目が複合的に影響を与えていることがうかがえる(図表2)。卒業時の評価項目の中で、総合満足度に対する相関が高かった項目トップ5は、1位「教育方針や校風に魅力がある」(0.49)、2位「たくさんの先輩・後輩・友人と出会える」(0.48)、3位「幅広い知識・教養が身につけられる授業が多い」(0.46)、4位「友人・知人など周囲の評判がよい」「優れた先生に出会える」(0.45)となった。一方、生活施設に関する項目「寮・スポーツ施設が充実している」は相関係数が低かった。

図表 1 大学生生活の総合満足度 (単一回答)

	満足している・計	満足している・計			満足していない・計			満足している・計	満足していない・計
		とても満足している	ある程度満足している	どちらともいえない	あまり満足していない	全く満足していない			
全体 (n=1703)	28.7 (%)	47.8	13.8	5.1	4.5	76.5	9.7		
性別									
男子 (n=983)	24.3	47.8	16.3	5.9	5.7	72.1	11.6		
女子 (n=720)	34.8	47.8	10.4	4.0	3.0	82.6	7.0		
文理別									
文系 (n=1027)	31.3	44.6	14.7	4.7	4.6	75.9	9.3		
理系 (n=601)	24.5	53.0	12.2	5.9	4.5	77.5	10.4		
志望順位別									
第1志望 (n=1000)	34.3	48.1	10.4	4.0	3.2	82.3	7.2		
第2志望以下・計 (n=703)	20.9	47.5	18.6	6.7	6.4	68.3	13.1		
性×文理別									
文系男子 (n=550)	26.7	42.9	18.9	5.4	6.1	69.6	11.5		
理系男子 (n=410)	21.3	54.1	12.6	7.0	5.0	75.4	12.0		
文系女子 (n=477)	36.7	46.5	9.9	4.0	2.9	83.2	6.9		
理系女子 (n=191)	31.4	50.5	11.2	3.6	3.3	81.9	6.9		

図表2 「総合満足度」と「卒業時の評価」の相関係数とその順位 (各単一回答)



2 入学前の期待は、卒業時に叶ったのか

●入学前の期待

「専門的な知識が身につく授業が多い」がトップ

大学生活に期待していることは「専門的な知識が身につく授業が多い」がトップ

「幅広い知識・教養が身につけられる授業が多い」が32%でトップ、続いて「幅広い知識・教養が身につけられる授業が多い」28%、「教育方針や校風に魅力がある」20%、「クラブ・サークル活動が楽しめる」19%、「友人・知人な

ど周囲の評判がよい」19%と続く。

●入学前の期待と卒業時の評価比較

データ比較には、様々な分析方法があるが、今回は「入学前の期待」と「卒業時の評価」それぞれに問うた45項目の順位を並べ、その順位差を比較した(図表3)。

期待以上だったのは“先生との出会い”

入学前後で評価順位が上昇した項目トップは「各授業の人数が適切である」(19順位↑)、続いて「有名・社会的評価の高い先生がいる」(15順位↑)、「先生が授業の取り組みに熱心である」(14順位↑)で、先生に関する項目が高い傾向にあった。

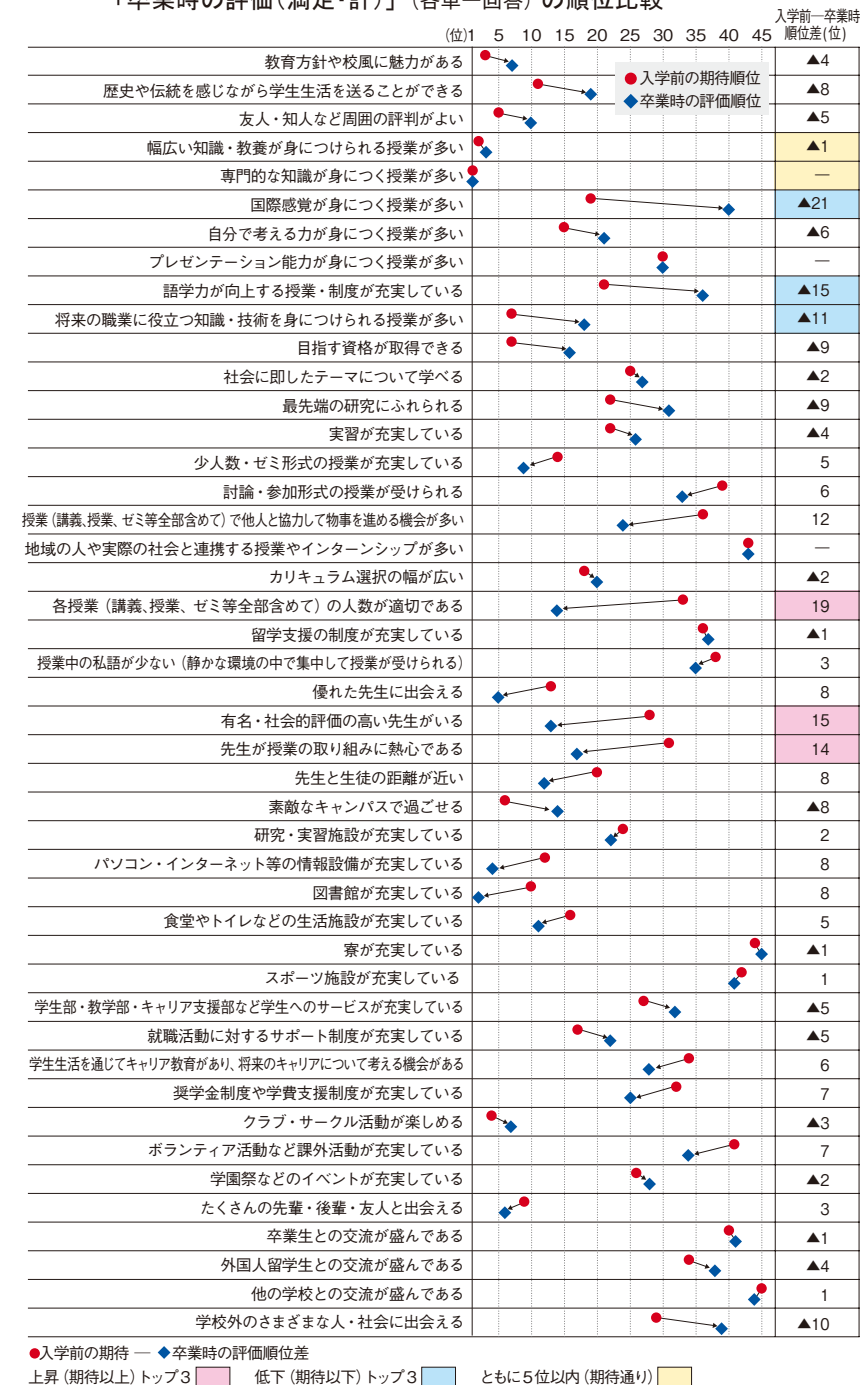
期待通りだったのは“知識を身につけられたこと”

入学前後評価順位ともに上位5位以内の項目は「専門的な知識が身につく授業が多い」(入学前、卒業時ともに1位)、「幅広い知識・教養が身につけられる授業が多い」(入学前2位、卒業時3位)であった。

期待外れだったのは“グローバル化への対応”

入学前後評価順位が低下した項目トップは「国際感覚が身につく授業が多い」(21順位↓)、「語学力が向上する授業・制度が充実している」(15順位↓)、「将来の職業に役立つ知識・技術を身につけられる授業が多い」(11順位↓)で、在籍中にグローバル化への十分な対応はできなかったと感じている大学生が多いようだ。

図表3 「入学前の期待」(複数回答)と「卒業時の評価(満足・計)」(各単一回答)の順位比較



3 大学在籍中に、成長できたのか

●在籍中の成長実感

76%の大学生が「成長したと思う」最も高いのは理系女子(リケジョ)

大学生活で「成長したと思う」大学生は76%で、うち「とても成長したと思う」は22%であった(図表4)。

男女別にみると、男子71%、女子81%と女子のほうが10ポイント以上高い。また、入学時の志望順位別にみると、第1志望か、第2志望以下であったかで「満足している」のスコアは14.0ポイント(図表1)の差だったのに対して、「成長したと思う」のスコアは7.6ポイント差となっており、成長実感は満足度より、第1志望と第2志望以下での差が縮まっている。男女×文理別にみると、理系女子が85%と最も高く、文系男子が69%で最も低い。

図表4 大学在籍中の成長実感(単一回答)

	成長したと思う・計	成長したと思う					成長していない・計
		とても成長したと思う	ある程度成長したと思う	どちらともいえない	あまり成長していない	全く成長していない	
全体 (n=1703)	75.5	21.7 (%)	53.8	14.6	6.5	10.0	
性別							
男子 (n=983)	71.1	20.9	50.2	16.5	7.9	12.4	
女子 (n=720)	81.4	22.8	58.6	11.9	4.6	6.7	
文理別							
文系 (n=1027)	74.5	23.6	50.9	15.9	6.2	9.6	
理系 (n=601)	77.4	19.1	58.4	11.8	7.2	10.7	
志望順位別							
第1志望 (n=1000)	78.6	24.0	54.6	12.9	5.6	8.5	
第2志望以下・計 (n=703)	71.0	18.4	52.6	16.9	7.7	12.1	
性×文理別							
文系男子 (n=550)	68.9	23.9	44.9	19.4	7.3	11.8	
理系男子 (n=410)	74.0	17.6	56.4	12.4	9.0	13.5	
文系女子 (n=477)	81.0	23.1	57.8	12.0	4.8	7.1	
理系女子 (n=191)	84.8	22.1	62.6	10.5	3.3	4.7	

●成長のきっかけ

5割が「卒業論文・制作を仕上げたこと」と回答

大学生活には、授業・ゼミ等の学び、クラブ・サークル・アルバイト・友人との交流、就職活動、留学等様々な要素があるが、人それぞれに成長を感じるきっかけは異なる。その状況をとりまとめたのが図表5である。全体の傾向をみると、「卒業論文・制作を仕上げたこと」と答えた人は51%と半数を超え、成長を実感するのに重要なファクターであることが分かる。次いで、「アルバイトでの人間関係・責任の重さ」45%、「難しい授業を理解しようと努力したこと」45%、「教授先生から直接指導を受けたこと」38%、「就職活動」35%と続く。正課教育の優先順位の高さがうかがえるが、アルバイト・就職活動等の副次的な

項目がそれと拮抗している。

**女子は“学外での活動”
男子は“学業”のスコアが高い傾向**

男女別に比較すると、女子は“学外での活動”、男子は“学業”に関する項目に高い傾向が見られる。自由回答を含め、この結果要因を推測するに、女子はアルバイトでの世代を超えた関わりや就職活動を通しての学外ネットワークなどの『環境変化』、一方、男子は卒業論文や授業理解などを目標としてその『目標達成』を成長きっかけと感じる傾向が強いのではないだろうか。

●大学生活で身についた力

**トップは「専門分野の知識・技術を理解・習得する力」、
最下位は「将来、グローバルに活躍できる力」**

大学生活とその中の多様な経験を通じ、大学生は成長を感じ、様々な職

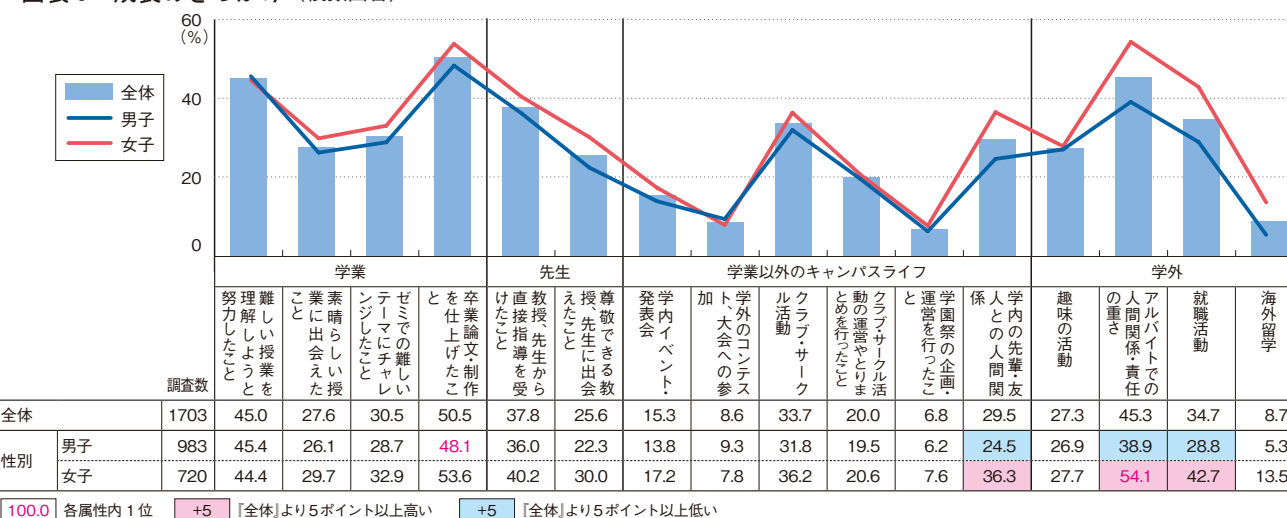
業能力・職業的態度を身につけていく。【基礎論理力】【統合力】【社会人12の基礎力】【社会的リテラシー】【グローバル・ローカル対応力】の獲得状況をきいたところ(図表6)、「専門分野の知識・技術を理解・習得する力」が41%でトップであった。続いて「物事を論理的に考える力」「物事をさまざまな視点から考える力」38%となっている。一方、スコアが最も低かったのが5%で「将来、グローバルに活躍できる力」、続いて「地域に貢献する力」

6%、「外国語を日常的に使える力」7%とグローバル化に対応した教育改革が大学ではまだ途上であることがうかがい知れる。

本調査から「満足度」は、校風・評判・先生・友人・身につく力など、様々な要因が複合的に混ざり合って形成されていることがわかった(図表2)。また、「成長のきっかけ」は“学業”と“学外での活動”が拮抗するスコアであり、様々な経験を契機として成長実感を得ていることがわかった(図表5)。

冒頭にも触れたが、今大学は「outcomes(学習成果)」を重視した大学改革を求められている。大学評価の一層の充実のためには、意欲の高い学生の獲得はもちろんのこと、成長実感を持ち、社会で活躍することで“この大学で学べたことに大満足”と言える学生の育成を目指すべきである。これこそが大学の存在価値であり、そのための仕組み作りが今後益々重要になってくるだろう。

図表5 成長のきっかけ(複数回答)



図表6 大学生活で身についた力(複数回答)

